育児に専念していた女性が子どもを優先しながら非正規雇用で働く心理的プロセス

吉村　由美[1,2]・山口　　一[3]

[1]練馬子ども家庭支援センター・[2]桜美林大学大学院心理学研究科
[3]桜美林大学

The Psychological Process of Women who Have Devoted Themselves to Childcare Entering Non-regular Employment while still Prioritizing Their Children

Yumi YOSHIMURA [1,2], Hajime YAMAGUCHI [3]
[1] Nerima Child and Family Support Center
[2] Graduate School of Psychology, J. F. Oberlin University
[3] J. F. Oberlin University

キーワード：母親、就労、非正規、アイデンティティ、M－GTA

抄録：

本研究は，自分で子どもを育てることを自らの意思で選択して退職した女性が子育てを優先するために非正規雇用で再就労した際にアイデンティティを再構成する心理的プロセスを検討することを目的に実施した。調査は，育児を契機に退職し，再就労して非正規雇用で 1 年以上働いており，夫がいる女性 10 名を対象に，半構造化面接（インタビュー）により実施し，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。その結果，子どもを育てることを通して母親として成長し，子どもを大切に思うからこそ母親である自分も大切にしたいという思いと個人の自分も成長したいという思いからの非正規雇用での再就労であり，母親として将来も子どもの成長に寄り添い続ける存在でいたいからこそ，母親としての自分も個人としての自分も大切にしたいという思いが認められた。

1. 問題と目的

アイデンティティの獲得は青年期の課題ではあるものの, 青年期以降もさまざまな心理・社会的変化を契機に問い直され，再吟味されて，さらに成熟していくものである（兼田・岡本 , 2007）。多くの成人男性は職業人としてのアイデンティティを幹としたライフコースを歩むのに対して，女性は職業，家庭，個人というさまざまなアイデンティティを自己の内部で統合しつつ，成人期を生きることが求められる（岡本 , 1996）。親になる前は自分自身を優先するが，親になると自分自身と同等に，あるいはそれ以上に他者である子どもを慈しみ育むようになる。他者をケアし，夫婦から家族となる変化の中で，これまでの自己を喪失することなく，親としての自己を取り込んだアイデンティティの変容が発達の課題となる（丸谷 , 2014）。専業主婦として育児に専念している多くの母親は，子どもを自分で育てたい，毎日の成長を見たいと願う気持ちを抱いており，母親としての自分の存在意義に自信をもっている一方で，子どもの価値が他のものと同一でないからこそ，自分で育てたいという思いと再就労を模索する葛藤や，育児をするだけの自分でいいのかという不安を感じている（百瀬・田中 , 2006）。子育て中心の生活の中で母親であることに充実感を感じつつも外との関わりを持てず，母親という役割を離れた自分が無い状態に閉塞感や孤立感をつのらせ,「個人としての自己」を求める思いと「母親としての自己」との間で葛藤を強く感じている（豊田・岡本 , 2006）。育児をしながら就労を継続したいと考えている母親は多く，再就労をめぐってさまざまな葛藤をかかえている母親と葛藤がほとんどなく条件がそろえばすぐにでも就労を再開したいと考えている母親がいることが示されており，葛藤の有無には自分で育てることの意義への強い思いが大きく影響する要因となっている（百瀬ら , 2010）。これらのことから，育児期はそれまでに獲得された「個人としてのアイデンティティ」と母親となることによって獲得されるべき「母親としてのアイデンティティ」がしばしば葛藤を引き起こす時期であるが，葛藤状況にある女性がいる一方, それぞれのアイデンティティが調和し統合されている女性もいることが示唆される。

育児に専念している女性の 6 割が就業を希望しており（厚生労働省 , 2015），実際に児童のいる世帯における末子の母親である女性の有職率は 7 割を超え，うち半数以上は非正規雇用で就労している（厚生労働省 , 2019）。いったん離職した女性が再就職するための社会制度の整備は重要だが，現在の社会環境のなかでは非正規雇用で働く女性のうち一定数が育児との両立のために主体的にその就業形態を選択していると推察される。

以上のことから，多くの母親たちが育児に専念する生活を送った後に非正規雇用として再就労をしているが，この時期はアイデンティティの再構成を伴うために葛藤を抱えやすいことから，この時期にアイデンティティがどのように変化していくのかを解明することが子育てを経験する多くの女性のライフコースを考える際に役立つと考え，本研究においては自分で子どもを育てることを自らの意思で選択して退職した女性が，子どもを優先するために非正規雇用で再就労した際のアイデンティティ再構成のプロセスを検討する。

２. 調査方法

2. 1　調査対象者と調査期間

育児を契機に退職し，再就労して非正規雇用で１年以上働いており，夫がいる女性 10 名を対象とした。本研究における非正規雇用とは，パート，アルバイトを示す。第一著者の所属する都内 A 区の趣味のサークル内の知人，およびその知人の紹介の知人で，対象となる女性に調査協力を依頼した。調査期間は，2020 年５月～ 10 月であった。

2. 2　調査手続きと倫理的配慮

承諾を得られた調査協力者に対して，研究の目的および倫理的配慮について説明し，フェイスシートを用いて聞き取りを行なった。インタビューガイドに沿って，１時間半程度の半構造化面接（インタビュー）を実施し, 調査協力者の承諾を得た上で内容を録音した。協力を断る, 中断などの場合もサークル内の人間関係に影響がないように配慮した。なお, 本研究は，桜美林大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認 No.19070）。

2. 3　調査内容

1）　フェイスシート

年齢，結婚した年齢，現在の勤務先・職務内容および勤続年数，過去の仕事および勤続年数，夫の年齢・職務内容・勤務時間，家族の状況（ジェノグラム）。

2）　インタビューガイド

インタビューでは，インタビューガイドを用いた（Table1 参照）。

Table1.　インタビューガイド

1. 母親になる以前は，自分の将来についてどのように考えていたか
2. 子育てに専念していたときは，子育て中心の生活や子どもに対してどのように感じていたか
3. 再就労について，どのように考えていたか
4. 再就労後，母親としての自分と働いている自分についてどのように感じているか
5. 再就労後，子どもへの思いは働く前からどのように変化したか
6. これからどのように生きていきたいと思っているか

３. 分析方法

分析方法は, 木下（2007）による修正版グラウンデッド･セオリー･アプローチ（Modified Grounded Theory Approach, 以下 M-GTA）を用いた。

3.1　分析テーマと分析焦点者

分析テーマは「育児に専念していた女性が，子ども優先を維持しながら非正規雇用で働くプロセス」とした。また，分析焦点者は「育児を契機に退職し，再就労して非正規雇用で働く，夫がいる女性」とした。

3.2　分析手続き

インタビュー実施後，次の手順で分析を行った。出産前後から再就労に至るまでと再就労後の母親としての気持ちおよび将来への思いについて詳細に語ったひとりの対象者を最初の分析対象として，分析テーマに関連して語られた語りを具体例として概念を生成し，分析ワークシートを作成した。同時に思考を外在化したものを記録した。同時並行にすべての対象者について類似の具体例を追加し，概念を精緻化していった。対極例についても検討することで解釈が恣意的に偏ることを防いだ。その後，生成した概念間の関係性を検討し，概念同士のまとまりであるカテゴリーを生成した。概念相互の関係，カテゴリーの関係，全体としての統合性を検討し，退職を決断後育児に専念していた時期から子ども優先の方針を維持しながら非正規雇用で働くプロセスを結果図で表した。概念とカテゴリーを用いたストーリーラインを作成して分析結果を確認した。

4. 結果

4.1　分析対象者の概要

分析対象者となった女性 10 名の概要を Table2 に示す。

Table 2.　分析対象者の概要（インタビュー実施時）

分析対象者	年齢	子どもの性別と年齢	現職場勤続年数	職種，職務内容
A	30 代	女(11)，男(9)	1 年	看護師，助産師
B	40 代	男(11)，女(8)	1 年 9 ヶ月	医療事務
C	40 代	男(17)，女(13)，男(9)	4 年 9 ヶ月	販売接客
D	40 代	男(15)	5 年	小学校支援員
E	50 代	女(23)，女(10)	2 年 3 ヶ月	中学校支援員
F	40 代	女(12)，女(9)，女(6)	4 ヶ月	療育保育士
G	40 代	男(17)，男(16)，男(7)	1 年	医療事務
H	30 代	女(16)，女(13)	3 年 4 ヶ月	訪問介護
I	30 代	女(16)，男(14)，男(5)	1 年 6 ヶ月	クリニック受付
J	40 代	男(16)，男(13)	2 年	病院内医療品管理

＊ A，B，D の 3 名は，新型コロナウィルスの感染予防対策として，オンラインでインタビューを実施した。

4.2　概念とカテゴリー

分析の結果, 31 個の概念が生成された。概念相互の関係からカテゴリー化を行った結果, 3 個の大カテゴリー，12 個のカテゴリーが生成された（Table3 参照）。

Table3.　大カテゴリー・カテゴリー・概念一覧

大カテゴリー	カテゴリー	概　念	定　義
	育児のために退職	仕事より育児を優先	仕事よりも子育てを優先しようと思うこと
		退職の決断	育児に専念するために退職を決断すること
子どもを大切にする生活	母親としての生活の受容	子どもに合わせた生活	子どもの年齢や予定に合わせた生活を送ること
		育児に必死な毎日	時間や体力に余裕がなく，育児に必死な日々を過ごすこと
		母親としての生活に向き合う	母親としての生活を知り，向き合おうとすること
	育児に伴う感情	育児の困難感	育児に息苦しさやイライラを感じること
		子どもがいることで感じられるしあわせ	子どもと過ごしたり，子どもが楽しそうにしている姿を見たりすることにしあわせを感じること
	育児を支えてくれる存在	夫の協力	夫が育児や家事などに協力すること
		親のサポート	親に育児や家事などを助けてもらうこと
		ママ友の存在	母親であることを通して知り合ったママ友がいること
		先生や地域のサポート	先生や地域の人など周りに育児や子どもを支えてもらっていること
	個人としての自分	ひとりになれる時間	ひとりの時間が欲しいと思うこと，ひとりになったときにホッとすること
		母親以外の自分	母親以外の自分に気がつくこと

再就労に至る過程	再就労への意識	再就労への思い	子育てが落ち着いたら再び働こうと考えていること
		家計を担う必要がない	経済的な理由で働く必要を感じていないこと
	再就労を検討	自分の時間があることに気づく	子どもの成長に伴って，自分のために使える時間があることに気がつくこと
		再就労のきっかけ	再就労のきっかけになるようなことが起こること
	子どもを優先できる働き方	子どもの予定に合わせた働き方	子どもの予定に合わせた働き方ができる職場を選ぶこと
		柔軟に対応してくれる職場	自分の都合に合わせて柔軟に対応してくれる職場を選ぶこと
		子どもの生活を変えたくない	就労前の子どもの生活を変えたくないと思うこと
		非正規雇用で働く	非正規雇用での就労を選択すること
子どもも仕事も大切にする生活	就労後の子どもへの思い	子どもが心配	一緒にいられないときの子どもを心配すること
		子どもへの影響を最低限にする工夫	就労によって子どもに及ぶ影響を最低限にできるように工夫すること
		子どもの力に気づく	今まで気づかなかった子どものできることに，就労後に気がつくこと
	母親としての思い	自分の中心は母親であると感じる	自分の中心は母親であると感じること
		将来の子どもへの思い	子どもの将来について考えたり願ったりしていること

	再就労によって獲得	働く楽しさ	働くことが楽しいと感じること
		両立による満足感	育児と仕事を自分なりのバランスで両立している生活に満足を感じること
		自分の収入を子どもに使える喜び	自分の収入を子どもに使えることを嬉しいと感じること
		家以外の居場所	家以外に居場所があると感じること
	キャリアビジョン	将来のキャリアへの思い	子どもの成長に合わせて，将来やりたい仕事や働き方について考えていること

4.3　結果図とストーリーライン

4.3.1　結果図

生成されたカテゴリー，概念の関係性を検討し，育児に専念していた女性が子どもを優先しながら非正規雇用で働くプロセスを結果図に示した（Figure1 参照）。

4.3.2　ストーリーライン

概念名とカテゴリー名によってプロセスを要約するストーリーラインを示す。分析の最小単位である概念を［ ］，概念間の関係から生成されたカテゴリーを【 】，大カテゴリーを〈 〉で表す。

自らの意思で［仕事より育児を優先］することを選んだ女性は［退職の決断］をして，【育児のために退職】する。出産後は［子どもに合わせた生活］で［育児に必死な毎日］を送るなかで［母親としての生活に向き合う］ことで徐々に【母親としての生活の受容】をしていく。【育児に伴う感情】として，［育児の困難感］を感じることもあるが，子どもの笑顔を見たときなどに［子どもがいることで感じられるしあわせ］を感じ，〈子どもを大切にする生活〉を送っている。

家事や育児への［夫の協力］や［親のサポート］，［ママ友の存在］，［先生や地域のサポート］は大切な【育児を支えてくれる存在】である。［ひとりになれる時間］は【個人としての自分】である［母親以外の自分］を感じられるひとときになっている。

一方，出産後も【再就労への意識】として，［再就労への思い］を持っているが，［家計を担う必要がない］と感じている。子どもが成長して［自分の時間があることに気づく］など［再就労のきっかけ］によって，【再就労を検討】するようになる。【子どもを優先できる働き方】を就労の条件として，［子どもの予定に合わせた働き方］，［柔軟に対応してくれる職場］，就労前からの［子どもの生活を変えたくない］ということが叶う働き方として［非正規雇用で働く］ことを選択する。【育児を支えてくれる存在】にある人たちからのサポートによって，【子どもを優先できる働き方】を可能にする再就労の検討ができている。

再就労後は，【就労後の子どもへの思い】として，一緒にいられない時間ができることで［子どもが心配］になり，［子どもへの影響を最低限にする工夫］をしている。また，就労前にはわからなかった［子どもの力に気づく］ことを嬉しく思っている。仕事ぶりを評価されるなどに［働く楽しさ］を感じ，仕事と子育ての［両立による満足感］，［自分の収入を子どもに使える喜び］，［家以外の居場所］を【再就労によって獲得】したと感じている。同時に，改めて［自分の中心は母親であると感じる］ことから，【母親としての思い】として［将来の子どもへの思い］を抱いている。そして，【キャリアビジョン】として，今は【子どもを優先できる働き方】を条件に仕事を選んでいるが，子どもの成長に伴い【個人としての自分】として，［将来のキャリアへの思い］を持っている。［育児に専念する生活］を送っているときから【就労後の子どもへの思い】，［将来の子どもへの思い］と，子どもの成長にしたがって母親としての子どもとの関わり方は変化していくが，子どもへの思いは変わることなく，〈子どもも仕事も大切にする生活〉を守っていきたいと考えている。

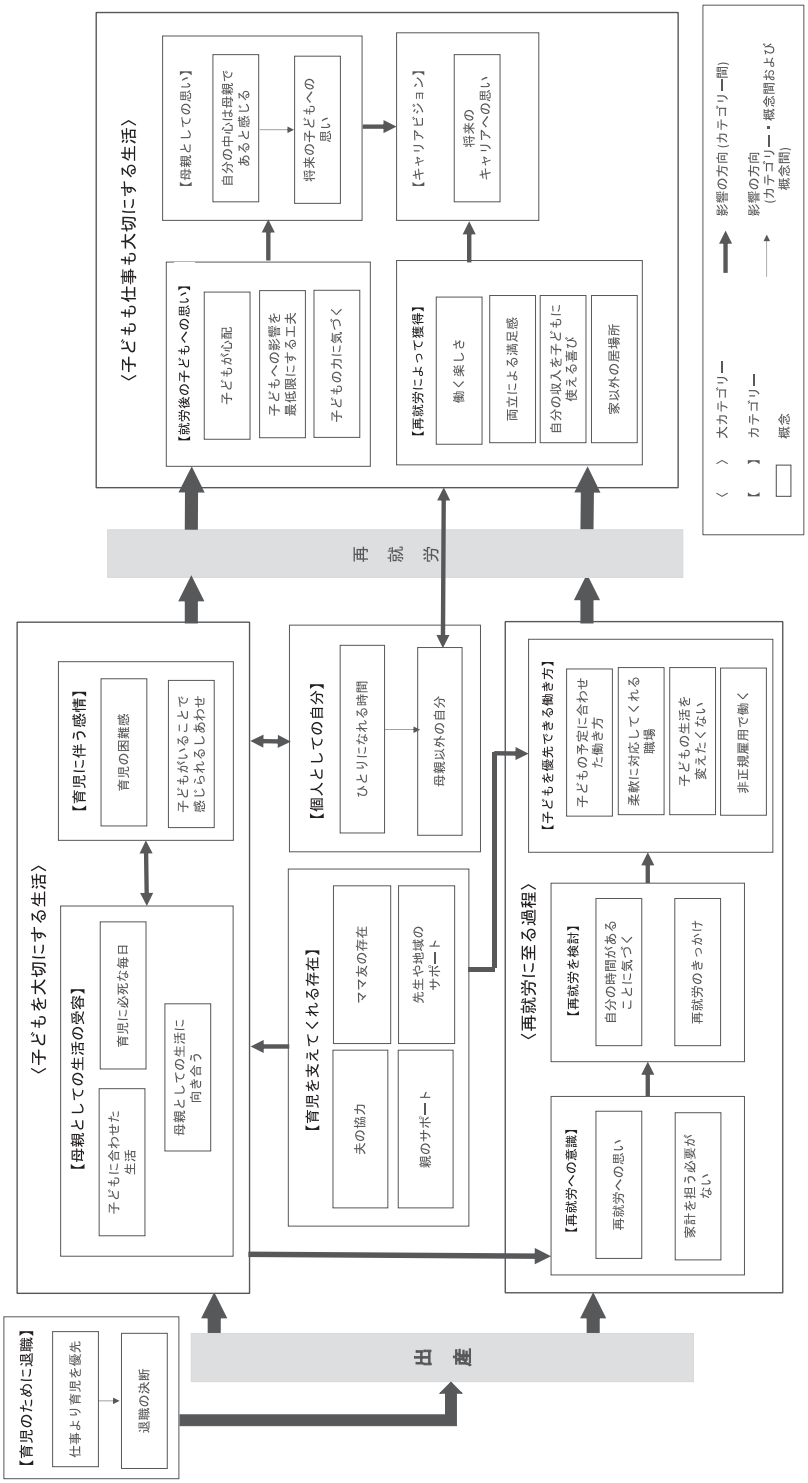
〈子ども仕事も大切にする生活〉
【母親としての思い】
自分の中心は母親であると感じる
将来の子どもへの思い
【キャリアビジョン】
将来のキャリアへの思い
【就労後の子どもへの思い】
子どもが心配
子どもへの影響を最低限にする工夫
子どものカに気づく
【再就労によって獲得】
働く楽しさ
両立による満足感
自分の収入を子どもに使える喜び
家以外の居場所
再就労
〈子どもを大切にする生活〉
【育児に伴う感情】
育児の困難感
子どもがいることで感じられるしあわせ
【母親としての生活の受容】
育児に必死な毎日
子どもに合わせた生活
母親としての生活に向き合う
【個人としての自分】
ひとりになれる時間
母親以外の自分
【育児を支えてくれる存在】
ママ友の存在
先生や地域のサポート
夫の協力
親のサポート
〈再就労に至る過程〉
【子どもを優先できる働き方】
子どもの予定に合わせた働き方
柔軟に対応してくれる職場
子どもの生活を変えたくない
非正規雇用で働く
【再就労を検討】
自分の時間があることに気づく
再就労のきっかけ
【再就労への意識】
再就労への思い
家計を担う必要がない
【育児のために退職】
仕事より育児を優先
退職の決断
出産
〈　〉大カテゴリー
【　】カテゴリー
概念
影響の方向（カテゴリー間）
影響の方向（カテゴリー・概念間および概念間）

Figure1.　結果図

5. 考察

5.1　カテゴリーごとの考察

以下，カテゴリーごとの考察を示す。対象者の発言は「　」，第一著者の発言は＜　＞で表し，発言の後の（　）は発言した対象者を示す。

【育児のために退職】

「子どもを産んで，このまま今の職場で続けるのは難しいなと思ってしまって，それでちょっと時間的な余裕とかもなくて。なので，そこの職場で続けるのは難しいと思ったので，いったん辞めることにしました。(C)」と，［仕事より育児を優先］するために葛藤なく［退職の決断］をしており，「上の子のときも小さい時期は意外にあっという間に過ぎてしまったので，一緒にいないともったいないかなっていう。(E)」では，育児に専念することを肯定的にとらえている。育児のために退職することが可能な安定した経済的状況があったということがあるが，［退職の決断］をする時点で子どもを最優先にしようと決めたことで，納得して〈子どもを大切にする生活〉に入っていったと解釈される。

〈子どもを大切にする生活〉

【母親としての生活の受容】

「お母さんなのでそういう生活をするんだろうな，それが当然なんだろうという風には思っていたし，特に不満とかはなかったんですけど，そうすべきなんだろうなっていうこととか，そういうものだと思い込んでいたので。(C)」や「私この生活したかったとは思ってなかったと思いますけど，もちろん。こんな感じなんだっていう感じだったと思います。(A)」には育児への戸惑いや諦めのような気持ちが表れている。一方，［育児に必死な毎日］を送りながらも「子どもが小さかったということもあるので，子どもを育てることが自分の中で一番大事だなって思えたし，あとは気持ちが子どもに向いていて子どもから離れられない自分も。＜離れたくない ?＞はい，やっぱり気になっちゃって，子どもを預けて自分が子どもから離れて仕事に行くっていう気持ちになれなかった。(C)」では，自分で育てることが母親としての自分にとっても子どもにとっても意味があると感じることで［母親としての生活に向き合う］ことができていたと考えられる。浅賀･三浦（2011）は，育児に対する心理的余裕が生まれ，母親であることを心理的に引き受けて適応的に受け入れる様子を『母親役割の内在化』とし，自分・家族のあり方の見つめ直しを行った結果生み出された現在納得できるキャリアプランの構築によって，母親が自身の生き方についての迷いを克服し，心理的に育児へと向かうことの達成によって『母親役割の内在化』が可能になると述べている。対象者も［退職の決断］をして，子どもが幼いうちは〈子どもを大切にする生活〉を送り，将来への［再就労への思い］を自分が納得できるキャリアプランとして構築することによって『母親役割の内在化』を可能にしたと推察される。

【育児に伴う感情】

「特に年子だったから，覚えていないくらい怒涛。（中略）もうほんと覚えてない。上の

二人のときとはほんと覚えてなくて，どうやってたのか，どうしてたのか。（G）」では，［育児に必死な毎日］を送り，「わちゃわちゃいるのを見てるのが楽しいみたいなところですかね。（中略）きょうだいで一緒にいるのを見てると。あと，こんなに成長してるってわかったときや学校に行って一生懸命頑張ってる姿を見るのも幸せでしたし。（F）」では［子どもがいることで感じられるしあわせ］を感じていると語っている。

荒牧・無藤（2008）は，育児への肯定的感情は子どもの年齢や性別，きょうだい数などにかかわらず母親に育児感情を支える基盤となりうると考えられ，こうした感情に支えられて多少の困難や苦労があっても育児に携わることができるのではないかと述べている。対象者が［育児の困難感］を感じつつも，［母親としての生活に向き合う］ことを受容しているのは［子どもがいることで感じられるしあわせ］という育児への肯定的感情が母親としての役割を支える基盤になっていたためと考えられる。

【育児を支えてくれる存在】

［夫の協力］と［親のサポート］は，［子育てに専念する生活］を支える重要な存在である。「自分の親と夫のご両親と私のきょうだい，夫のきょうだいみんなが，ほんとにみんなが長女のことを可愛い可愛いって言って，愛してくれてるのがもうちっちゃい赤ちゃんのときからそうで，あと私が大変過ぎないようにすごい支えてくれたんですよね。一人で映画行っといでとか言ってくれたり，みてるからって言ってくれたり，そういうのがすごく私がつぶれずに済んだっていうか，背負わずに済んだ。（F）」と，物理的な支えに加えて，子どもへの愛を態度で示してくれたことが悩みながら育児をしていたときの精神的に大切な支えになっている。「そのママと今もずっと友だちなんですけど，その子がいてくれたから多分結構いろんなことが乗り越えてこれたかなって。（I）」では［ママ友の存在］が大事な支えになっていることが示唆される。

「その先生がすごくいい先生で，（中略）その出会いもあって気持ちも楽になったかもしれない。子育てってわからないことだらけでしょ。いいのよ，それでいいのよ，頑張んなくていいのよ。（中略）緊張してるし，初めての子だし，でもそういう風に言われたら頑張んなくていいんだと思っちゃって。（G）」とあるように，［先生や地域のサポート］は客観的に自分の育児と向き合う機会と安心感を与えてくれる存在になっている。対象者の語りは，荒牧・無藤（2008）の，夫や友人・園の先生からのサポートが多いと母親の肯定感は高くなり，周囲からの支えや助けも肯定感を支える上で重要である，ということを裏付けるものとなっている。支えられているという安心感を感じながら育児に専念する時期を過ごせたことが再就労後の【子どもを優先できる働き方】における安心感にもつながっており，「主人が家事をする。言ってるわけじゃないんですけど，お願いはしてないんですけど，私が出るときはやるみたいな感じで助けられてますね，（A）」では，再就労後も［夫の協力］が大きなサポートであることが推察される。

【個人としての自分】

「ひとりの時間が得られたときは，ほんとにリラックスできると言うか，嬉しい，最高

って思ってましたね。＜その時間に何か特別なことをしなくてもひとりで過ごせることでお母さんじゃない自分を感じられたりしたのかな＞ありましたね。(C)」と，［ひとりになれる時間］に［母親以外の自分］を感じており，それが再就労など【個人としての自分】について考えることにつながっていったと考えられる。

［育児に専念している生活］においても「○○ちゃんママって呼ばれていて，E ちゃんはどこに行っちゃったんだろうと思い出して。(E)」と，［母親以外の自分］を自覚的にとらえている気持ちを語っている。再就労後には働いている理由について「一番は・・自分でいる時間，収入の保証が同じくらいかな。(E)」と，明確に［母親以外の自分］を自覚して，個人としての自分を求める気持ちがあることが示唆される。

〈再就労に至る過程〉

【再就労への意識】

［再就労への思い］について，「また出来るときが来れば戻ればいいしっていうような，まあすごく生活に困ってるっていうわけでもなかったし，今は子育てに専念して，またいずれ戻れれば，（中略）何か仕事に戻れればっていうような感覚でいましたね。(F)」と，再就労の明確な時期を考えていないのは，子どもを優先している表れであり，それを可能にしているのは主に家計に担い手となる夫がいるので，［家計を担う必要がない］と感じていることが大きな要因になっている。

【再就労を検討】

「学校生活も慣れてきて，ちょっとヒマになったと言うか，自分の時間ができるようになったので，もうそろそろいいかなあと思ってなんとなく受けたところがたまたま採用していただいたので。(B)」や「ママ友が最近仕事を始めたと，幼稚園のときから始めていて，子どもが幼稚園に行ってる間に仕事が出来るんだなっていうのがわかったと言うか，その人の話を聞いていて，こういう生活が出来るんだなっていうのがわかって，ちょっと私もやってみたいなって興味を持って。(C)」と，久しぶりに［自分の時間があることに気付く］ことが［再就労のきっかけ］になり，元々持っていた【再就労への意識】が促進されて【再就労を検討】するようになっている。

【子どもを優先できる働き方】

［子どもの生活を変えたくない］ので［子どもの予定に合わせた働き方］や［柔軟に対応してくれる職場］を条件に［非正規雇用で働く］ことを選択している。「子どもたちを残して出ようっていうのは私の頭にはあんまりなくて，（中略）ちゃんと送り出して，自分が最後に出てっていうのと，帰ってくるまでには家にいてあげたい。(G)」や「遊んで帰ってきて，お腹減ったよっていうときにごはんを出したいっていうのが多分ずっとあって。(J)」では，母親として子どもにしてあげたいという強い思いが語られており，［育児に専念する生活］でも就労後も子どもへの思いは変わらないからこその【子どもを優先できる働き方】の選択であることが示唆される。

〈子どもも仕事も大切にする生活〉

【就労後の子どもへの思い】

【子どもを優先できる働き方】をしていても，子どもがひとりになってしまうときは［子どもが心配］になり，子どもを預かってもらうなど［子どもへの影響を最低限にする工夫］を講じている。また，「お手伝いしてくれたりとか，あとメールでご飯炊いといてとか（中略）働いたことで子どもも自分でできる，やらせることって言うか，お手伝いに関してとかですけど。思ったよりもできるんだなっていうのがありました。大丈夫なんだなって安心できる。心配してたところとかは大丈夫なんだし，思ってるよりも私がいなくても生活は回る。回るって言うか，大丈夫なんだなって思いました。(A)」では，［子どもの力に気付く］ことが再就労を肯定する一要因であると示唆される。

【子どもを優先できる働き方】にもかかわらず，［子どもを心配］する状況を作ってまで就労していることを自覚的にとらえる語りはなかったが，「おばあちゃんちで宿題やったりして待ってて，おかえりなさいって言ってくれる家を確保しつつ。私は朝そこに自転車を置いて行くので，そこに迎えに行って一緒に帰る。(E)」のように［子どもへの影響を最低限にする工夫］によって子ども優先を維持しているととらえていると推察される。

【再就労によって獲得】

「急成長したねとか言われると嬉しいし，頑張ろうってなるし。今まで主婦ってほめられる職業じゃないでしょ。別に美味しいごはんを作ろうが，ママとっても美味しいとかってそんなに言うわけじゃないし。(G)」では，仕事は主婦や母親役割とは異なり，頑張った分の評価を得られることに［働く楽しさ］を感じている。非正規雇用での就労であっても，母親である自分と［母親以外の自分］の両方を感じられる自分なりの［両立による満足感］がある。また，「自分が働いたことによって，そのお給料を例えば子どものおこづかいにちょっと充てられるとか，お洋服を買ってあげられるとか，なんか自分のだけのためのお金じゃない。(I)」と，［自分の収入を子どもに使える喜び］も得られている。

「働き始めたのが 18 年ぶりで，3 時間くらい働いたんだよね。帰るバスの中でなんか涙が出てきた。なんか私も働けるんだって。社会の一員としてお金を稼げるんだって。(中略)そういう風になりたいって思ったことはなかったけど，自分がそういう社会の一つのコマになれたっていうか，なんか本当に感動しちゃって。こんな私でも働けたって。(G)」からは，働くことで社会の一員であると実感し，「家以外の行く場所があるっていう居場所ですかね，居場所が出来たことがやっぱりそこでの人間関係，一緒に働いている人との人間関係も長くいればどんどんよりお互いを思い合うような関係になれるので，居場所ですね。(C)」では，職場を［家以外の居場所］としてとらえている。「ひとりの人って思われてるんだなって思って。そこではママでもなく，もうほんとに私っていう場所ではありますよね。それは今でもそうですけど，仕事に行くと，着いたら自分で切り替える感じではありますよね。仕事場の自分，ママとしての自分，キャラクターじゃないですけどそういうのは違いますよね。(I)」では［母親以外の自分］を明確に自覚し，「なんかひとりの

人間として，ママでもなく，奥さんでもなくいられる場所，それで評価されたお金みたいな。なんかもしそこで自分が働かなくなったら多分それもそれで物足りなくなってくるんだろうなっていうのは思いますね。(I)」では［母親以外の自分］が手放すことができない存在になっている。育児に専念する生活において母親である自分に不満を感じていたわけではないにもかかわらず［母親以外の自分］が大切なものになっていく現象は，［家以外の居場所］が大切になっていくことと密接な関係があると考えられる。

【母親としての思い】

【再就労によって獲得】したものは大切だが，「仕事はメインの生活じゃあないし，子どもが学校に行ってる間は特に子どものために何かをやるわけじゃないので，その間に仕事行ってるっていう感覚で。そうですね，基本的にはおうちにいて，子どもと主人のために何かやるっていう。(J)」では［自分の中心は母親であると感じる］ことが語られている。将来については第一に［将来の子どもへの思い］が語られた。「子どものことを第一に考えつつ，子どもも成長して大人になると思うので，そのときに同じ目線で仕事とのこととか話せたらいいなと思うし，大人同士として，そのためには自分もなにか仕事に就きたいなあって思えてきて。（C)」には，子どもを大切に思うからこそ母親である自分も大切にしたいとと同時に，子どもの成長に寄り添い続けるために［母親以外の自分］としても成長していきたいという強い思いが感じられた。

【キャリアビジョン】

将来は正規雇用で働く，資格を取得する，内容で仕事を選ぶなどさまざまな［将来のキャリアへの思い］を抱いており，子どもか仕事かを選ぶのではなく，子どもの成長に合わせて〈子どもも仕事も大切にする生活〉を守りたいという思いがあることが示唆される。

5.2　全体の考察

① 育児に専念する生活において個人としての自分と母親としての自分の間に葛藤が見られなかったこと

山口（2010）によると，母親になるということは子どもを産むことで一時的に生じる急激な変化ではなく，子どもを産み，育てる過程に生じ続ける緩やかな発達（あるいは成長）であり，子どもを産むということは母親になることではなく，母親になっていく発達の出発点に立ったということに過ぎず，母親としての経験を重ねることにより育児への自信を獲得できていくものと考えられる。また，育児に対して効力感を抱くことができた母親は母親アイデンティティの形成もスムーズに進み，母親アイデンティティを形成しているということは母親としての役割を自分なりに理解し，それを受容し，また母親としての自己の役割遂行結果を肯定的に評価できているということであると述べている。対象者も育児に専念する生活に戸惑いや困難感を感じつつも周りのサポートを得ながら育児への自信を獲得することで母親としての自分に存在意義を感じるようになり，安定した母親アイデンティティを形成することができたと考えられる。

母親としての役割を肯定的に受け止め，積極的に携わり，充実感や成長感を感じている

母親は子育て中にアイデンティティ拡散となりにくい（清水 , 2004）。対象者は自ら育児に専念することを選択し，母親としての充実感を感じながら積極的に関わり，経済的な不安がない中，時が来たら再就労しようというライフプランを持ち続けていたことで，アイデンティティの危機を経験することなく生活していたと推察される。一方で，個人としての時間を作れない，あるいは周囲のサポートが得られないなどの状況が起こると，育児に対して肯定感を抱けず，母親アイデンティティの形成が困難になるのではと推察された。

② 子どもを優先したいと考えながらも再就労を選択したこと

母親としての発達が，母親という役割を持った一人の女性の独立した発達として単独で進むのではなく，子どもとの関係性の中においてのみ発現し，子どもの発達とともに進んでいくものである（山口 , 2010）。対象者においても，母親として将来も子どもの成長に寄り添い続ける存在でいたいからこそ，母親としての自分も個人としての自分も大切にしたいという思いがあり，再就労はひとりの人間として発達し続けるための選択のひとつであったと解釈される。子どもの成長を親としての喜びととらえながらも徐々に親の手を必要としなくなっていることを感じることで，それまで主に自分を支えてきた「母親アイデンティティ」とは異なる「個人としてのアイデンティティ」を求めようとしての再就労の検討でもあったと考えられる。

③ 育児と仕事に葛藤を感じることなく両立に満足感を感じていること

「すごく自分の今の生活に満足できています。子どもがいるから母親も出来るし，仕事も行けるし，っていうところですごく充実感とか満足はしています。（中略）自分が働いている姿を子どもに見せている，働く大人の姿を子どもに見せられるっていうのが自分にとって嬉しいですね。(C)」からは，子どもを育てることを通して母親としての成長を感じられるからこそ，「個人としての自分」としても成長していきたいと考えていることが示唆される。母親という役割のみを担う自分にとどまらず，職業人としての役割も担うことによって人間的成長を求めているととらえられる。

④ 子どもの成長の先に自分の仕事や将来のことを考えていること

今は非正規雇用で就労することで母親である自分に軸足を置き，［将来の子どもへの思い］および仕事や将来の生活について考え，［子どもも仕事も大切にする生活］を守りたいという思いについて語っている。子どもの成長の先の［将来のキャリアへの思い］として，非正規雇用で働くことにとどまらず，将来のキャリアについても考えている自分に肯定感を感じて生きていきたいという思いが見られた。ポスト子育て期の女性は，母親役割に固執せず，子の巣立ちを積極的に受け止め，未来へ目を向けて自己の問い直しを行い，母親役割以外の自分の役割，特に社会の中での位置付けについて主体的に模索し，積極的に関与していくことが重要となる。そして，子の巣立ちがアイデンティティ変容の転機となるが，子の巣立ち後に危機が訪れるのではなく，子どもの成長を実感する中で，実際に子どもが巣立つ前に子の巣立ちを予感し，自己の問い直しが起こっており，比較的早い段階からこの巣立ちを意識し，自分らしい生き方の模索を始めている（兼田・岡本 , 2007）。

本研究においては，子どもの成長を実感する喜びといつか自分のもとを巣立っていくという寂しさというアンビバレントな思いを抱えつつ，個人の自分として将来のキャリアを模索する姿から，母親アイデンティティを喪失することなく職業アイデンティティを取り込み，新たなアイデンティティを形成していこうとする様子を見ることができた。

5. 3　本研究の限界と今後の課題

本研究では，個人のアイデンティティに母親のアイデンティティをうまく統合できずに葛藤を経験した対象者がいなかった。これは今回の対象者の約半数が第一著者と同じ趣味のサークルに属していたことが影響を与えている可能性がある。今後はより多様な女性を対象とすることで，子育て期の女性が非正規雇用で働くなかで新たなアイデンティティを形成あるいは拡散するプロセスについての新たな知見が得られることを期待する。

謝辞

本研究の実施にあたりまして，調査にご協力くださった皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

荒牧 美佐子・無藤 隆（2008）. 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い : 未就学児を持つ母親を対象に . 発達心理学研究 , *19*（2）, 87-97.

浅賀 万理江・三浦 香苗（2011）. 育児初期の母親が抱える心理的混乱への適応過程－語りの分析による質的検討－ . 昭和女子大学生活心理研究所紀要 , *13*, 55-68.

濱田 維子（2005）. 仕事と家庭の多重役割が母親の意識に及ぼす影響 . 日本赤十字九州国際看護大学 intramural research report, *3*, 147-158.

兼田 祐美・岡本 祐子（2007）. ポスト子育て期女性のアイデンティティ再体制化に関する研究 . 広島大学心理学研究 , *7*, 187-206.

柏木 恵子・若松 素子（1994）.「親となる」ことによる人格発達 : 生涯発達的視点から親を研究する試み . 発達心理学研究 , *5*, 72-83.

木下 康仁（2007）. ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて . 弘文堂

厚生労働省（2015）. 女性の再就職・再雇用 . https://comeback-shien.mhlw.go.jp/source/pdf/woman.pdf（2019 年 12 月 15 日現在）

厚生労働省（2019）. 平成 30 年度国民生活基礎調査　結果の概要 . https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa18/dl/02.pdf（2019 年 7 月 2 日現在）

丸谷 充子（2014）. 子育て支援における親の生涯発達支援の意義－親としてのアイデンティティの統合－ . 浦和大学・浦和大学短期大学 浦和論議 , *50*, 133-147.

百瀬 良・浅賀 万理江・三浦 香苗（2010）. 未就園児育児に専念する母親の再就労に対する思考過程についての質的検討－文化的要因との関連から－ . 昭和女子大学生活心理研究所紀要 , *12*, 99-113.

百瀬 良・田中 奈緒子（2006）. 専業主婦は「個」としての自分を意識しているか―「個」としての自分と，妻としての自分・母親としての自分との関係―. 昭和女子大学生活心理研究所紀要 , *9*, 63-73.

岡本 祐子（1996）. 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究 . 日本家政学会誌 , *47*（9）, 27-38.

奥津 眞里（2009）. 主婦の再就職と働き方の選択－結婚・育児等によるリタイアと職業復帰 . 日本労

働研究雑誌 , *586*, 68–77.
清水 紀子（2004）. 中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ . 発達心理学研究 . *15*（1）, 52–64.
豊田 史代・岡本 祐子（2006）. 育児期の女性における「母親としての自己」「個人としての自己」の葛藤と統合－育児困難との関連―. 広島大学心理学研究 , *6*, 201-222.
山口 雅史（2010）. 母親になるということ―母親アイデンティティを巡る考察―. あいり出版